OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海外フィールドスタディを通じた学習成果と高度汎用力育成の可能性
Author(s)	金森, サヤ子; 三田, 貴
Citation	Co＊Design. 2019, 5, p. 25-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71645
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

海外フィールドスタディを通じた学習成果と高度汎用力育成の可能性

金森サヤ子（大阪大学COデザインセンター）
三田貴（大阪大学 国際共創大学院学位プログラム推進機構　超域イノベーション博士課程プログラム部門）

Learning Outcomes and Opportunities for Development of Transferable Skills through Overseas Field Study

Sayako Kanamori (Center for the Study of Co* Design, Osaka University)
Takashi Mita (Institute for Transdisciplinary Graduate Degree Programs, Osaka University)

本稿では、大阪大学における大学院教育の中でも、文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラム」のオールラウンド型に2011年度に採択された「超域イノベーション博士課程プログラム」において提供されてきた科目「海外フィールドスタディ」を通じた学習成果と高度汎用力の教育効果について考察した。その結果、本科目を通じて「高い国際性」、「専門以外の分野の幅広い知識」、「他者と協働する力」の3つの能力が他の能力と比較して育成されること、また、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」、「自ら課題を発見する力」も一定程度能力の向上がみられることがわかった。一方で、「課題の解決策を立案する力」、「課題解決の実現に挑む力」、「独創的な能力」、「高度な専門的知識・研究能力」といった能力の育成までは至っていないこともわかった。超域イノベーション博士課程プログラムの海外フィールドスタディは2018年度以降も継続して実施されることから、今後は海外フィールドスタディの各コンポーネントと教育効果の関連性や、そこに発現するプロセスをより明確に認識し、本科目の質的な充実を目指していくことが必要である。

In this paper, authors examined learning outcomes and impacts on students' transferable skills through Overseas Field Study provided by the Cross-Boundary Innovation Program at the Osaka University, supported under the Programs for Leading Graduate Schools of the Japanese government's Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. Degree of internationality, extensive knowledge outside one's field, co-operative skill was significantly developed through the subject. Ability to identify essential issue, skill to identify challenges was modestly developed. On the other hand, impact of the subject was not significant to skill to develop solution, ability of solution implementation and advanced technical knowledge and research capacity. Given Cross-Boundary Innovation Program will be continued for FY2018 and beyond, it is essential to improve quality of the subject by continuously exploring associations between Overseas Field Study components and their educational impacts.

キーワード ＿＿ 海外フィールドスタディ、学習成果、高度汎用力

Keyword ＿＿ Overseas field study, learning outcomes, transferable skills

1 序文

1.1 日本におけるグローバル人材と海外体験学習に関する動向

1.1.1 社会・政策動向

日本におけるグローバル人材についての議論は、2000年代に入り、産業界が海外勤務従業員の育成を課題として認識し始めたことに端を発す（吉田 2014:81）。産業界から大学への人材育成の要請は1990年代からみられたが、これが2000年代後半に入ると政府の政策として採用され、グローバル人材の育成は企業内での課題から大学の課題としても捉えられるようになった（吉田 2014:81）。実際、2011年以降、文部科学省は「大学の世界展開力強化事業」、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」と立て続けに大学のグローバル展開力強化や、グローバルに活躍できる人材の育成を目的とした施策を打ち出した。2013年には国家戦略「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」の中でグローバル人材の育成について言及し、官民協働による「トビタテ!留学JAPAN」に代表されるように、グローバル人材の育成とその活用は日本社会全体の課題として位置付けられるようになった。

1.1.2 大学教育動向

大学における海外体験学習は、このようなグローバル人材についての議論がなされる1990年代には、既に一部の大学で実践されていた。特にキリスト教系の大学のミッションと海外体験学習との間に親和性が高かったこと、また、1980年代に国際協力系 NGOで勤務していた者が、1990 年代に大学での職に就き、その経歴を反映した教育を大学で展開したこと等が理由として挙げられる（子島 2015:18）。2000年代に入ると、上述した社会・政策動向とも相まって、多くの大学が海外体験学習に取組み始めた。実際、大学教育における「海外体験学習」研究会が、2004年に最初の研究会を開催した際には、30大学の教職員及び学生の参加であったが、近年の研究会では、約50大学の教職員、学生の参加に加え、旅行会社や一般企業関係者も含め、約100程度が参加するまでになっている。

1.1.3 大阪大学における動向

このような流れを受け、大阪大学では、グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）が研究・教育・実践を強化することを目的に、2010年に海外体験型教育企画オフィス（FIELDO; Fieldwork, Internship and Experimental Learning Design Office）を創立し、海外フィールドスタディ、海外インターンシップ、海外プレ・インターンシップ、グローバル・セミナー及びワークショップを実施してきた。GLOCOLでは、後述する2015年度までの間に、FIELDOを通じて19カ国47件の海外フィールドスタディを実施、全学の学部1年生から博士後期課程の14研究科11学部に所属する308名の学生がこれに参加した（大橋 2016:4）。GLOCOLは、文部科学省からの支援の終了に伴い、2015年度を以て閉鎖、その役割の一部は2016年に設置されたグローバルイニシアティブ・センターに継承され、現在で

も学部生を対象に、海外フィールドスタディが提供されている。

このような動きと並行して、2012年には、上述したような学部や研究科を超えて高度教養や国際性を涵養する横断的な教育の推進を、5年一貫の博士課程に所属する選抜された履修生に対して提供する「超域イノベーション博士課程プログラム」が開設された。このプログラムでは、高度な専門性に支えられた知的体力と勇気、創造力を持ち国内外の政財官学界で活躍してグローバルリーダーとなる博士人材の養成を目指している。

本稿では、大阪大学における大学院教育の中でも、文部科学省による「博士課程教育リーディングプログラム」のオールラウンド型に2011年度に採択された「超域イノベーション博士課程プログラム」（超域プログラム）において提供されてきた科目「海外フィールドスタディ」を通じた学習成果と高度汎用力の教育効果について考察する。

2 方法

本研究では、超域プログラムにおいて、2012年度から2017年度にかけて実施された計13回の「海外フィールドスタディ」に関する、シラバス（2012-2017年度）、活動報告書（2012-2017年度）、年次報告書（2012-2016年度）、総括報告書（2017年度）、教務ワーキンググループその他会議用資料（2012-2017年度）、超域プログラムの教育効果に関する調査報告書（2017年度）、関連書籍のレビューを実施した。シラバスの年度比較には、テキスト比較ツールdifffver.6.1を用い、その差異を検証した。

3 結果

3.1 超域イノベーション博士課程プログラムにおける海外フィールドスタディ

3.1.1 歴史

超域プログラムは、文部科学省の博士課程教育リーディングプログラムとして構想・採択され、2011年度に具体的な教育内容が検討されたときから、海外における実践的な学習の場を導入することが想定され、海外フィールドスタディが組み入れられることとなった。大阪大学における海外参加型教育としては、GLOCOLが本プログラム開設以前から全学を対象にした、海外実習（海外フィールドスタディ及び海外プレ・インターンシップ）を単位付与型の実習科目として拡充していたことから、超域プログラムの創設にあたっては、GLOCOLの教員がその知見を生かす形で海外実習の企画に参画し、プログラ

ムが目指す高度汎用力に対応する諸スキルを習得するための教育が検討された。そのため、超域プログラムの海外フィールドスタディが目指す基本的な方向性自体は、GLOCOLのそれと大きくは変わらない。しかしながら、GLOCOLの海外フィールドスタディが個別のテーマを提示し、参加学生を全学から募集する形態を取っていたのに対して、超域プログラムの海外フィールドスタディは、予めプログラムの履修生として選抜された大学院生のみを対象とした必修科目として位置付けられたため、個別のテーマを学習することを主目的とした実習ではなく、海外のカウンターパートと協働して課題に取組むなど、高度な汎用力を実践的に学習する場として企画された点が異なる。

超域プログラムの海外フィールドスタディは、課題発見型インターンシップとして位置付けられ、引率教員が同行した。本プログラムの海外フィールドスタディは、異なる専攻分野から構成される履修者が6～10名程度で一つのチームを形成し、教員による引率と、協力団体・大学との連携により実習が行われてきた。グローバル化する現代社会の中で、訪問先における地域特有の課題あるいはグローバルな現象と結びついた社会的課題の把握を体験的に行うと共に、それら課題の解決への足がかりとなる議論や調査を、現地関係団体と協働する形で経験できるようデザインされた。これらの活動を海外で教室外の環境において行うことを通じて、履修者の多文化理解力を拡充するとともに、英語ならびに現地語を実践の場で駆使することでコミュニケーション力を押し広げる機会となった。

3.1.2　概要

超域プログラムの海外フィールドスタディは、2年間の年度を跨ぐ形で科目が設定され、1.9単位を付与する必修科目として位置付けられている（但し、2017年度に限り、文部科学省からの支援の終了を踏まえ、単年度、選択必修科目として開講された）。主な対象年次は博士前期課程1年次（修士1年次）で、担当教員はプログラムの特任教員を中心とし、一つの目的地に対して2～3名から構成される。教員は、プログラムで海外実習を担当する者に加え、訪問する地域の専門家あるいは引率とリスク管理のために必要な教員を非常勤講師として配置することもあった。開講言語は日本語を中心とするが、実習中や事前学習において英語を使用する場面があるため、日本語と英語による運用が想定された科目となっている。

授業の目的と概要は、年度毎に微修正はなされているものの、全ての年度に共通した授業の目的と概要は図1の通りであった。また、2012～2013年度は海外プレ・インターンシップも含めた科目構成となっていたため、これに関連する学習目標や授業計画も含まれていたが、これらを除く海外フィールドスタディの学習目標及び授業計画は全ての年度を通じて図1の通りであった。

授業の目的と概要
国境を越えて、異なる文化や価値観に向き合う姿勢を体得し、学生が各々の専門性を生かしながら、グローバルな諸問題を発見し、それらに実践的に取り組む力を養うとともに、そこから自分たちが生まれ育ち、慣れ親しんだ社会や文化を客観的にとらえなおすことを目的とする。異なる文化的、政治的、社会的、経済的な背景を持つ人びとと問題をともに考え、解決に向かって取り組むために必要なコミュニケーション力、柔軟性といった資質を養うとともに、多角的な視点をもって思考し、複雑な現実のなかで行動できる学生を育成する。諸問題に取り組む意欲を喚起し、より深く現実を見つめる姿勢を養う。

学習目標
1. 事前学習と海外実習を通じて、異なる政治、経済、社会、文化背景をもつ社会や人びとの立場を理解し、物事を多角的視点から捉えることができるようになる。
2. 自分の専門性を生かしながら、異なる立場の人びとと協働する姿勢を持つことができるようになる。
3. 海外での経験から学んだことをもとに、自分自身が慣れ親しんだ社会や文化を相対化して理解できるようになる。

授業計画
1. 事前学習
   ・イントロダクション（1コマ）
   ・FSの心構え（1コマ）
   ・リスク管理（1コマ）
   ・ロジスティックスに関するセッション（3～5コマ）
   ・事前学習（4～5コマ、全体及び行き先別）
2. 海外実習
   ・実施期間について
   ・費用負担について
   ・実習期間中のふりかえりシートの記入と提出について
3. 事後学習
   ・ふりかえり
   ・発表
   ・報告書作成について

図1　超域プログラム海外フィールドスタディの授業目的と概要・学習目標・授業計画

実施年度や行先によって内容や扱う課題が異なることから、教材や参考文献は事前に指定することはせず、各年度の海外フィールドスタディのテーマや訪問先は、各履修生の興味関心に応じて適切なものを選定する形とした。また、事前学習では、授業外学習として実習先に関する課題が課された。

海外フィールドスタディの成績評価は、全ての年度を通じて、①事前学習への参加度・課題提出、②実習への参加度、③事後学習・報告会への参加度と報告書提出の3つからなされていたが、そのウエイトは年度によって多少異なる。また、上述の通り、2012～2013年度は海外プレ・インターンシップも含めた科目構成となっていたため、海外プレ・インターンシップへの参加と報告が一つの評価項目として1/2のウエイトを占めていたが、それを除く海外フィールドスタディの成績評価項目は、他年度と同様であった。

さらに、全ての年度で公欠以外の欠席は認められないこと、またその理由として、海外実習におけるリスクやそれへの対応、また、社会的・文化的な事柄についての学習・理解が重要であることから、公欠の場合でも、自ら担当教員に連絡して指導・指示を受けることを注記している。

また、超域プログラムでは、プログラムを通じて育成を目指す人物像とスキルを、6つのKey Driver

と、それに紐づく25のDriverから成る超域コンパス[1)]として設定しており、各科目と関係の深い5つのDriverをシラバス上で選択することができる。海外フィールドスタディは、超域人間力（Challenge）、超域ネットワーキング力（傾聴・情報リテラシー、建築的関係構築）、超域実現力（実行力）、超域専門力（超える力）の5つのDriverを獲得し得る科目として設定している。

3.1.3　実績

超域プログラムでは、2012年度から2017年度までの6年間に、9カ国13件の海外フィールドスタディを実施し、このうち、8カ国がアジア地域、5カ国が大洋州地域の国であった。2012年度は3件、2013年度以降は一年度に2件の海外フィールドスタディを実施した。主な渡航時期は2～3月であったが、2017年度のみ、文部科学省からの支援の終了を踏まえ、1件は9～10月にかけて実施した。平均実施期間は14.4日間（13-17日）であった（表1）。この間の海外フィールドスタディの総履修生数は92名、所属内訳を見てみると、大阪大学大学院16研究科中15研究科で、所属先で見てみると工学研究科（20名）が最も多く、次いで人間科学研究科（19名）、理学研究科（10名）、医学系研究科（10名）と続く。文理比率は48%と52%、男女比率は41%と59%と均等が取れたものとなった。また、留学生比率は12%にのぼった。なお、海外フィールドスタディ科目の定員は20名程度とし、行き先別の定員は最大10名までとしていた。

引率者は毎回2～3名で、2013年度に実施された1件を除いて男女の教員が最低1名ずつ引率した。これは実習地滞在中の参加学生の対応を考慮したものである。男性教員のみで引率した1件は、現地のカウンターパート団体のメンバーが女性を中心として構成されていたため、女子学生への対応体制が確保できていたためである。

表1　超域プログラム海外フィールドスタディの訪問先・期間・共通テーマ・協力団体

年度	日数	渡航先		共通テーマ	協力団体
		地域	国		
2012	15	アジア	ブータン	国民総幸福 農村生活と人々の価値観	College of Natural Resources, Royal University of Bhutan
2012	14	アジア	フィリピン	フィリピン社会における家族計画 職場でのジェンダーの問題 鉱山開発問題	Graduate School of Business, Ateneo De Manila University University of San Carlos
2012	14	大洋州	クック諸島	離島環境と生活体験実習 オークランドの太平洋諸島出身者コミュニティ	Mangaia School
2013	13	アジア	スリランカ	スリランカ都市近郊コミュニティの生活 紅茶生産とグローバル経済 多宗教社会の共生	特定非営利活動法人JIPPO Postgraduate Institute of Agriculture, Peradeniya University
2013	14	大洋州	パラオ	ミクロネシア中核都市・グアムにおけるパラオ人コミュニティ パラオ人のライフスタイルと社会変容	Palau Resource Institute Palau Community College Palauan Community Association of Guam
2014	14	アジア	東ティモール	抵抗と独立の歴史と現代的課題 アタウロ島における漁村コミュニティの生活	特定非営利活動法人JIPPO Haburas Foundation

2014	14	アジア	ブータン	ブータンの世界観・宗教観・国民総幸福 農村生活と現代的課題	College of Natural Resources, Royal University of Bhutan
2015	14	アジア	スリランカ	スリランカの分断の歴史と開発再考 タミル人コミュニティでの生活体験	特定非営利活動法人　ピースウインズ・ジャパン Department of Sociology, Colombo University
2015	17	大洋州	マーシャル諸島	ホノルルにおける太平洋諸島民の生活と課題 環礁・離島の生活と現代的課題 気候変動と移住	College of the Marshall Islands Ebeye Elementary School Center for Pacific Islands Studies, University of Hawai'i at Manoa East-West Center Women United Together Marshall Islands (WUTMI)
2016	16	アジア	フィリピン	市民社会とグローバル・シティズンシップ 都市貧困と国際移動労働 離島漁村の生活体験	University of the Philippines Visayas University of the Philippines Diliman Batis Center for Women Hands on Manila LOOB
2016	16	大洋州	サモア	島嶼国からみる社会変容とグローバル・ダイナミクス オークランドのサモア人コミュニティ	Centre for Samoan Studies, National University of Samoa
2017	13	大洋州	パラオ	気候変動の環境インパクト グアムのパラオ人コミュニティ	Palau Conservation Society Palau Resource Institute Micronesia Area Research Center, University of Guam Palauan Community Association of Guam
2017	13	アジア	マレーシア	環境問題と開発 グローバル都市・クアラルンプール	特定非営利活動法人パルシック（PARCIC） PIFWA/PIFWANITA Universiti Sains Malaysia

3.1.4　企画

超域プログラムの海外フィールドスタディの実施時期は、対象となる履修生が2週間程度渡航できる時期とした。そのため、他の科目ならびに夏季に実施された英語集中実習との重複を避ける必要性を鑑み、上述の2017年度のみを除き、例年2～3月に実施した。

渡航先は、履修生が普段慣れ親しんでいる社会とは異なる場所とし、基本的にはアジアまたは大洋州地域で、地域の大都市圏から比較的「遠隔」である目的地が選定された。同時に、訪問先を含む地域で中核となる都市、例えば、ホノルル、オークランド、マニラ、クアラルンプールなどを短期訪問する機会を設けることで、地域全体を俯瞰し、グローバル化のダイナミズムを実感できるよう構成した。海外フィールドスタディは教室外の学習の場であることから、実施場所の選定は、信頼できる現地連携団体から協力が得られるかどうかが第一の条件となる。そのため、担当教員の研究・実践フィールドを活用する場合や、既に現地社会と信頼関係を十分に構築できている団体の活動地を活用する場合とがあった。

実施時期、渡航先と協力団体が決まると、担当教職員は事前調査（下見）を実施する。事前調査は主に以下二点の目的を以て実施された。一点目は、多くの渡航先は担当教員が既に何らかの繋がりを持っている場合が多いため、現地関係者との従来の関係性（例えば研究のフィールド）から、海外フィールドスタディとの関係性に構築し直すこと。そして二点目は、海外フィールドスタディのサブスタンス

及びロジスティックスの確認と決定である。主な事前調査項目は図2に示した。一回目の事前調査で実施可否の判断をし、二回目の事前調査で詳細計画を決定する場合、あるいは天候等の理由で十分に一回目の事前調査が実行できない場合は、計二回の事前調査を実施する場合もあった。事前調査に十分な投資を行うことで、関係者との関係性を醸成し、担当教職員が訪問地の事情に習熟する機会を持つことで、効果的な学習の場を生み出すことができる。

・協力団体や訪問先関係者への海外フィールドスタディの説明と各種協議
・訪問地のリソースの有用性の確認
・移動手段や経由地、税関、出入国管理、検疫等出入国に係る各種手続き
・宿泊施設、会議室、食事場所等の確認
・治安、衛生、医療事情に関する情報収集と視察

図2　主な事前調査項目

また、超域プログラムの海外フィールドスタディでは、異なる専門的背景を持つ履修生が参加する特性を活かして、個別の関心事を追究する姿勢は保ちつつも、履修生全員が全員で取組む共通テーマを設定している（表1）。このテーマ設定は、基本的には現代世界におけるグローバルな課題に関してローカルな文脈から課題を理解することが大枠として念頭に置かれるが、具体的なテーマは訪問先や協力団体が持つリソースを勘案しながら決定、あるいは履修生が話し合って設定することもあった。

訪問先の学生が実際に行き来する双方向的な交流のあり方は毎回の企画段階で検討されるが、予算などの都合により実施が困難であることが多く、その不均等な関係は海外で実習を行う際の大きな課題となっている。そのような中で、双方向的交流を実現したケースとして特筆すべき事例が2つある（図3）。

事例1：2012年度　フィリピン　アテネオ・デ・マニラ大学経営学研究科での交流
超域プログラムの履修生がマニラで協働的学習を経験した後に、同大学から参加したフィリピン人学生を翌年度に日本に招聘し、交流と学習を日本の地で展開させた。フィリピン訪問時にはフィリピンが直面するグローバルな或いは地域の課題について両大学の学生が共に学習し、フィリピンの学生の来日時には日本の課題に取り組み、相互理解を深めた。

事例2：2014年度　ブータン　ブータン王立大学農学カレッジでの交流
ブータンでの海外フィールドスタディを担当したブータン研究を専門とする教員が、ブータン王立大学農業カレッジの開発学の授業科目を担当し、そこに超域プログラムの学生が1週間の実習期間に参加し、ブータンの学生と大阪大学の学生が合同で山村でのフィールド実習を行い、その結果を整理し報告会を実施した。

図3　双方向的交流を実現した事例

この2例以外にも、2012年度のブータン、2015年度のサモア、2016年度のフィリピン、2017年度のマレーシアでは、訪問地の大学生・大学院生と一定程度の日数、活動を共にし、効果を上げたが、これらでは超域プログラムの予定と都合に合わせてもらったもので、訪問地学生の本来の学修スケジュールに大きな変更を強いた点で課題が残る。

フィールドにおける実習の方法は、訪問地の学習リソースによって異なるものの、共通の基盤として地元学の手法や理念が意識されて実践されてきた。地元学は、熊本県水俣市の吉本（2008）や宮城県の結城（2009）らがそれぞれ提唱し、日本各地に展開されていった地域学習の実践的手法である。水俣の地元学の実践の場では、行政が農山漁村の地域コミュニティと協働し、外部からの訪問者を受け入れて、地元の生活や英知を共に学ぶ場を提供している。訪問した人々は、農山漁村の豊かで歴史ある文化と資源、知恵、伝統、環境を「あるもの探し」という活動を通じて学習する。訪問者が地元の人に質問を繰り返すことで、地元の人も、その経験から地元のことをより深く知り、さらには新たな文化を創造する機会となる。水俣の地元学では、「あるもの探し」の活動から、「地域資源カード」や「絵地図」の作成をして、それらを地元コミュニティの人々に共有し、さらには未来のことを話し合う。こうした一連の作業は、訪問者が学びを得られるだけでなく、受け入れコミュニティの人々の自覚や将来への変革を生み出す価値を創造する力となることが強調されてきた。地元学のもつ、地域を知り、地元の人と深く交流し、共に学習するスタイルは、フィールドスタディの目的に適うものである。超域プログラムの海外フィールドスタディでは、こうした地元学の理念と実践を念頭に置き、訪問地コミュニティにもポジティブな変化のきっかけをつくることができれば、フィールドスタディが持つ不均衡な性質を少しでも是正できるのではないかという期待を持って学習の場を創造している。

3.1.5　運営

超域プログラムの海外フィールドスタディの運営は、主に超域プログラム関係者と協力団体によってなされる。担当教員の職務は、海外フィールドスタディに係る教育や研究のみならず、プログラム立案やリスク管理まで多岐に亘る。また、病気や怪我等のリスクに備えて複数人で担当すると共に、上述した通り、男子学生、女子学生への対応体制を確保するためにも、男女の引率者を最低1名ずつ確保することが不可欠であった。また、事務職員も、予防接種やリスク管理を含むロジスティックス面や予算管理等で運営に大きく関わってきた。

次に、協力団体についてだが、海外フィールドスタディは大学が設定する教育効果が達成できる形態とすると同時に、大学の制度的制約の中で実施することとなるため、協力団体の選定には工夫が必要であった。具体的には、協力団体の要件として、以下三点を重視した。第一に、現地での学習の場となるリソースの有無、第二にそれらリソースを教育目的に提供してもらえるかどうか、つまり相当な時間的・作業的な負荷に対応してもらえる団体かどうかと同時に、受け入れ団体・大学の利益になるかどうか、第三に、双方向的な行き来を含む交流の実現が難しい中、訪問し学習させてもらうことの対価として金銭による契約が可能かどうかである。三点目に関しては、前述の通り、本来は超域プログラムと、大学や機関など現地訪問先の双方が行き来することが望ましいが、大阪大学による受入れが超域プログラムの性質上困難であったため、単発のプログラムとして実施する形をとった。こうしたある意味一方的で特殊な事情を理解した上で教育に参画する状況を許す関係者と連携する必要がある。そのため、受入れ団体・大学の関係者とは一定程度の信頼関係がないと実現は難しい。こうした事情を考慮する

と、協力団体を選定する際には、担当教員の訪問フィールドとの繋がりから決定される場合が多かった。

3.1.6　実施

超域プログラムの海外フィールドスタディは、事前学習、海外実習、事後学習の大きく3つのパートから成る。事前学習では、イントロダクション（科目の概要説明）、フィールド訪問時の心構えに加え、リスク管理、ロジスティックス・セッションと、フィールドリサーチの方法論や渡航先に関する事前学習を含む。海外フィールドスタディは、必ずしも情報収集や知識の習得だけが目的ではない。事前学習においてどの程度学習するかは、フィールドに出る際には可能な限り学習をしておく派と、それに異を唱える派があることが指摘されている（松田 2011）ものの、超域プログラムの海外フィールドスタディでは、歴史的背景や文化的特性といった訪問先に関する一定程度の知識、共通テーマに関する基礎知識、現地での振る舞い等も含むフィールドリサーチの方法論については最低限事前に学習することによって、現地での学びを最大化できるようにしている。

渡航先に実際に赴く海外実習では、表2に示した8つのコンポーネントを効果的な学習や活動の形態として位置づけ、学習テーマと訪問地のリソースに応じて選択して用いた。

学習の基本形態としては、第一に、主に訪問地到着後比較的早い段階で専門機関を訪問したり、大学教員や実務者などの専門家から講義を受けるスタイルが挙げられる。専門機関は様々であるが、政府機関、大学、民間組織、NGO/NPO、医療施設、教育施設などが想定される。訪問初期の段階では、訪問地の概要や共通テーマについて導入的な学習を行うケースが多かった。訪問地の専門家や実務者等受け入れ機関の関係者から直接講義を受けることによって、あるいは聞き取り調査や交流活動を行うことによって、現場感を醸成しながら学習が進められると同時に、有益な助言を得る機会を設けることが可能となる。またNGO/NPOや大学などの専門機関が活動する現場を訪問することもあった。さらに、可能な場合、政府や大学等の組織を率いる指導者や代表者を表敬訪問することで、リーダー層と直接の対話を通じ、訪問地の政治・経済・社会情勢の理解を一層深める機会とした。将来に向けた人的ネットワーク構築が念頭に置かれる場合もある。訪問国が、パラオやマーシャル諸島のように国家自体の規模が小さい場合は、大学単位での訪問は訪問地の社会でも注目されることから、事業を円滑・安全に進めるという観点からも、こうしたリーダー層と面会することが有用な場合もある。

二つ目の形態として、特に訪問日程の初期の時間を活用して、訪問国や地域の全体像を知ることや歴史や文化を体系的に学習することを目的に、主要政府施設、例えば大統領府、国会、戦争モニュメント、墓地、教会、学校、市場等を訪問したり、博物館や美術館を訪問して体系的かつ効率的に歴史や文化について学習する機会を提供した。また、街歩きを通じて訪問都市の全体像把握をする手法もとられた。

三つ目に、訪問地の学生やコミュニティと協働して課題を検討したり、フィールド実習を共に行うことがある。海外フィールドスタディの主要構成要素の一つとして、訪問地に高等教育機関がある場合は、これをできるだけ実現させるよう企画してきた。

第四に、ホームステイ（民泊を伴う訪問実習）あるいはホームビジット（民泊を伴わない日中のみの家庭訪問実習）という形態を取る生活実習も、海外フィールドスタディの活動としては、前述の学生との協働と同様に重視されてきた方法である。ホームステイまたはホームビジット中は、自ずと地元の人々の中で生活・活動をすることになるので、訪問地の人々の暮らしを観察・体験すること通して、生活全般を理解することができる。期間は条件によって2～7日間と様々で、場所の多くは農山漁村と位置付けられる地方部のコミュニティが選定されるが、都市近郊で実施することもあった。ホームステイ期間中は、共通日程は最低限に留め、各履修生がホストファミリーとの生活の中や会話の中から、共通テーマや個人テーマに関する事柄を聞き取る機会とした。滞在（訪問）家庭は現地協力団体が選定した。滞在地の言語状況は様々で、英語が第二言語として通じやすい場合（クック諸島、パラオ、マーシャル諸島、クック諸島）もあれば、家庭内やコミュニティで英語は通じず、ほぼ現地語話者しかいない場合（スリランカ、東ティモール、マレーシア、ブータン）もあった。英語が通じにくいコミュニティの場合、現地協力団体のスタッフをホームステイ実施地に滞在させることで、平常時だけでなく緊急時にも言語的支援を含めた学生ならびに受け入れ家族への対応が可能となるような体制を組んだ。可能な場合、上述した現地教育機関の学生に日中の活動で通訳してもらうこともあった（ブータン、フィリピン、サモア）。ホームステイなどの生活実習では、主に地元学的な手法を用いた。その成果はホームステイ・ホームビジットの終盤にワークショップや送別会などの場を設置し、地元コミュニティ構成員に対して学習成果を共有・還元した。

第五に、訪問地における環境の様子やライフスタイルを学習する手段として、海洋実習、漁業実習、農地実習、マングローブ域実習、離島実習など、野外で直接対象物を観察したり、住民の活動を体験する学習を取り入れた。

第六に、グローバルなダイナミズムをより多角的に履修生に体感させるために、主要訪問地以外に、その国または地域から比較的近く広域圏の中核都市の機能を持つ都市、あるいは訪問国の首都を訪問計画に入れている。主要中核都市訪問時には、主訪問地との地理的・社会的関係性の理解が促進されるように、訪問地出身者のコミュニティ（オークランドやホノルルにおける太平洋島嶼地域出身者のコミュニティ）を訪問したり、主訪問地に高等教育機関が限定的にしかない場合（パラオ、マーシャル諸島など）は大学を訪問するなどして、中核都市に居住する主訪問地出身者にインタビューをするなどして理解を深めた。グローバル化に伴って人の移動の数と頻度が増加する中、主訪問地の政治経済上のプレゼンスを過小評価しないためにも、主要中核都市への訪問は有用である。

第七に、海外フィールドスタディの実習中は、一日の終わりの時間に、ふりかえりの時間を設けていることを挙げたい。ふりかえりは、参加者が全員で経験や学び、疑問などを共有する場である。超域プログラムの場合所属研究科が全く異なる履修生が混在しているため、バックグラウンドの異なる履修生がそれぞれの知見や経験に基づいた見方を共有することで、一人で行うフィールドワークでは達成しえない多様な視点からの学習を可能としている。ホームステイ期間中は、原則としてホストファミリーとの時間を最大限確保できるように配慮しつつ、可能な範囲でコミュニティセンターなどを利用してふりかえりを行ってきた。

第八に、特にホームステイやホームビジット、あるいはコミュニティやNGO/NPOの活動現場で学習したことは、滞在の終盤にワークショップを開催するなどして、地元社会に学びを共有する場を設定することを重視してきた。学習したことをただ持ち帰り、地元に還元しないで帰国してしまうことは、植民地主義の時代に列強の為政者や研究者が行ったことと変わらないとの考えに基づく。これは、前述の地元学の理念からも大きく影響を受けている。還元の場は、学習したことを訪問地のコミュニティや関係者に共有できるだけでなく、未来に向けた新たな関係性が構築される場としても機能する。

最後に、帰国後の事後学習では、ふりかえり、報告会、報告書の作成を実施した。超域プログラムでは毎年2～3組のチームに分かれて渡航先を変えて海外フィールドスタディを実施していることから、事後学習のふりかえりでは、渡航先別のふりかえりに加えて、合同でのふりかえりも実施した。こうすることにより、渡航先が異なっていても共通の学びが多くあることに気付く機会を提供した。また、報告会や報告書の作成を通じて、活動報告のみならず、活動から学習したこと、協働実践で達成したこと、研究に関連した示唆、人材としての成長、ネットワーキング拡充、キャリアに関する将来への展望の伸展、語学実践等についても考える機会を提供した。履修生にとっては、学位取得後のイメージに向けて、他の学習スキームをどのように活用して展開させていくか検討しつづけるプロセスの一環としても位置付けられている。

表2　海外実習における効果的な学習や活動の形態と事例

学習や活動の形態	事例
1. 専門機関と専門家からの学習	・大統領との面会（パラオ・マーシャル諸島） ・県知事との面会（スリランカ） ・日本国大使訪問（パラオ） ・大学学長との面会（ブータン） ・国会議員との面会（ブータン、東ティモール） ・伝統首長など特別な名誉ある称号を所持する識者やリーダーとの面会（ブータン、パラオ、サモア） ・国際協力NGO専門家からの学習（スリランカ、東ティモール） ・現地NGO専門家からの学習（クック諸島、パラオ、東ティモール、マーシャル諸島）
2. 主要政府施設視察と博物館等施設の活用	・タシチョゾン（国王執務・国会・寺院複合施設）（ブータン） ・国会（東ティモール、パラオ、マーシャル諸島） ・慰霊碑、墓地（スリランカ、パラオ、東ティモール） ・大統領府、大統領府官邸（フィリピン、パラオ） ・最高裁判所（パラオ） ・博物館（パラオ、マレーシア、フィリピン、東ティモール）
3. 同世代の学生との協働	・ワークショップによる課題発見や課題解決の検討（スリランカ、東ティモール、フィリピン） ・授業への参加（フィリピン、ブータン、パラオ、マーシャル諸島、サモア） ・共同で実施するフィールド調査（ブータン、サモア、フィリピン、マレーシア）

4. ホームステイ等を通した生活実習	**地方部における事例** ・クック諸島（マンガイア島） ・パラオ（アルコロン州、マルキョク州、オギワル州） ・ブータン（ロベサ郊外） ・東ティモール（アタウロ島） ・スリランカ（トリンコマリー郊外） ・フィリピン（マランガバン島） ・サモア（ポウタシ村） **都市近郊における事例** ・スリランカ（モラトワ） ・マーシャル諸島（マジュロ環礁） ・サモア（アピア）
5. 野外体験型実習	・海洋実習（パラオ、マーシャル諸島、サモア）：スノーケリングを用い、健全なサンゴ礁と白化したサンゴの比較観察や、漁業資源ならびに観光資源の実情を観察 ・漁業実習（東ティモール）：地元の漁業協同組合の協力のもと、漁師とともに実際に出漁し、素潜り漁や採集活動を体験 ・環境実習（パラオ）：無人島の漂着ゴミの回収を行い、周辺国との環境上の繋がりを学習 ・農地実習（スリランカ）：紅茶農園での茶摘み実習を行うことで労働環境の実際を学習 ・マングローブ域実習（マレーシア）：ボートに搭乗して河川流域の環境を学習するとともに、生物相や漁業資源について学習 ・離島実習：日帰りまたは宿泊を伴う形で離島を訪問し、気候変動の影響（パラオ）や米軍撤退後の課題（マーシャル諸島）について学習
6. 近隣の中核都市または首都訪問	・パラオにとってのグアム（米領） ・マーシャル諸島にとってのホノルル（米国ハワイ州） ・トリンコマリー（スリランカ）にとってのコロンボ ・東ティモールにとってのバリ（インドネシア） ・イロイロ（フィリピン）にとってのマニラ ・ペナン（マレーシア）にとってのクアラルンプール ・クック諸島やサモアにとってのオークランド（ニュージーランド）
7. 日々のふりかえり	・履修生と引率教員によるふりかえり（ブータン、クック諸島、マーシャル諸島、フィリピン、サモア、パラオ、マレーシア） ・履修生、引率教員、協力団体関係者によるふりかえり（東ティモール、スリランカ、パラオ、マレーシア）
8. 訪問地への学びの還元の場	・フォーラムの機会を捉えた関係学生やコミュニティ成員の招聘（東ティモール、フィリピン、パラオ、マレーシア） ・フェアウェルレセプションの場を活用した報告会の開催（クック諸島、パラオ、マーシャル諸島、スリランカ、東ティモール） ・訪問地の大学などにおける報告会の開催（スリランカ、ブータン、サモア） ・学習した内容を絵地図にまとめた後、村を再訪して各家庭で個別に報告したケース（ブータン）

3.2　リスク管理

超域プログラムでは、学生を海外に送り出す様々なスキームを海外フィールドスタディ以外にも用いていることから、履修生ができるだけ安全に活動が遂行できるよう、リスク管理に関する様々な取り組みを実施してきた。海外渡航時のリスク管理体制の構築からはじめ、平常時の教職員による情報収集やセミナー受講、海外渡航時の海外旅行保険加入、緊急時アシスタンス会社との契約、予防接種の指導、外務省「たびレジ」の登録、緊急時のための教員用マニュアルの策定、緊急時を想定したシミュレーションの実施、履修生用のマニュアルの整備、履修生用向けの危機管理セッションの実施などを、海外渡

航が含まれる活動用に策定してきた。これらに加え、海外フィールドスタディの実施に際しては、教職員による現地予備調査の実施、訪問地のリスク管理情報の提供、緊急連絡用通信手段の確保（携帯電話あるいは衛星携帯電話）、複数引率体制の確保などが実行されてきた。

3.3　他科目との関連

超域プログラムの海外フィールドスタディは、独立した授業科目ではあるものの、他の科目とも相互に連携している。海外研修関連の科目だけでも、集中語学（英語）研修（サマースクール）、海外フィールドスタディ、グローバルエクスプローラ（海外プレ・インターンシップ）、その他プログラムが企画・実施した海外での研修の4つを提供してきた。特に超域イノベーション海外実習科目に分類されている、海外フィールドスタディとグローバルエクスプローラ（海外プレ・インターンシップ）は、相互に補完且つ履修生が海外における自律的な活動へとスムースに展開できるよう配置されている。海外フィールドスタディは、主に「開発途上地域」（非工業国）を対象とし、教員の引率のもと異なる学問分野を専門とする履修生がチームで実習先カウンターパートと協働し、グローバルな課題について学習することを目的とした科目である。一方のグローバルエクスプローラ（海外プレ・インターンシップ）は欧米やアジア都市部を含む全世界を実習地とし、博士後期課程で実施する超域イノベーション実践（長期インターンシップ）やその後のキャリアパスへとつながる活動を履修生が個人単位で行う科目である。超域プログラムの一期生が4年次に進学した2015年度以降、海外フィールドスタディ、グローバルエクスプローラ（海外プレ・インターンシップ）に加えて、博士課程後期2年次（博士2年次）にイノベーション実践（長期インターンシップ）を提供した。また、全ての年度を通じて超域プログラム履修1年目には語学（英語）研修の科目を提供した。なお、2016年度より、海外プレ・インターンシップ及び長期インターンシップは、その内容が必ずしもインターンシップに限らないことを理由に、グローバルエクスプローラ及び超域イノベーション実践に名称変更された。

このように海外に学生を派遣するプログラムが複数展開する中、海外フィールドスタディで培った経験と構築したネットワークを活用して、グローバルエクスプローラならびに超域イノベーション実践でアジアや大洋州地域における活動へとつなげた例がいくつかある（図4）。どの履修生も、海外フィールドスタディの経験からアジアや大洋州地域での活動へのハードルが下がり、多くの学生が欧米諸国で活動する中、アジアや大洋州地域での活動に積極的に取り組むようになった。

事例1：パラオでの海外フィールドスタディを経験した履修生が、その翌年に同国国務省にてインターンシップを実施
事例2：マーシャル諸島で海外フィールドスタディを経験した履修生が、同じ大洋州地域のパラオにてグローバルエクスプローラの実習を実施
事例3：東ティモールで海外フィールドスタディを経験した履修生が、グローバルエクスプローラ及びイノベーション実践を同じ東南アジア地域のタイで実施
事例4：東ティモールで海外フィールドスタディを経験した履修生が、イノベーション実践を同じ大洋州地域のパラオのNGOで実施

図4　他科目への展開事例

3.4　評価・成果

3.4.1　高度汎用力とは

高度汎用力には様々な定義があるが、本稿では超域プログラムの科目「海外フィールドスタディ」をその対象としているため、超域プログラムで用いられている高度汎用力をその定義として用いることとする。即ち、高度汎用力とは、社会でイノベーションを起こす力、イノベーション人材に求められる能力を指し、具体的には課題発見力・課題解決力・社会実践力の3つから構成されるものとする。また、2016年の大阪大学全体としての高度汎用力の内容を受け、ディプロマポリシーではその力量をより具体的に、以下4つの通り掲げている。具体的には、専門の学術領域における確かな研究能力、高度な教養、国際性の総体としての基盤となる力、物事を俯瞰的にとらえることにより、未知の問題を見つけ出し、新たな課題を設定する力、独創的な思考を通じて、新たな考え方や仕組みを積極的に取り入れた課題の解決策を立案していく力、そして様々な立場の他者と関わり協働しながら、確かな指針をもってグローバルに行動することによりイノベーションを起こし新たな価値を創造する力、である。

3.4.2　海外フィールドスタディの学習成果・課題と高度汎用力育成

海外フィールドスタディの活動を通して履修生が得た学びの成果は多岐に亘る。実習期間中のふりかえりや、2017年度のパラオならびにマレーシアで実施した海外フィールドスタディの報告書（大阪大学未来戦略機構第一部門超域イノベーション博士課程プログラム2017年度海外フィールドスタディ・パラオチーム履修生 2017、大阪大学未来戦略機構第一部門超域イノベーション博士課程プログラム2017年度海外フィールドスタディ・マレーシアチーム履修生 2017）に記された総括から、大きく分類すると5つの事柄に関する視点が学びとして示され、以下のように要約できる（表3）。こうした総括から、履修生が新しいことを学び、協働と共生について検討を加えながら、自らの立ち位置や研究との関わり方関する未来像を批判的あるいは建設的に検討を巡らせている様子が伺えてくる。

表3　海外フィールドスタディを通じた主な学習成果

新たに獲得した視点	事例・能力向上のポイント
1. 訪問国の課題に関する新たな視点の獲得	「国として一括りにできないことを学んだ」 「訪問国内の都市部と地方部の格差を目の当たりにした」 「訪問地と日本の関係の歴史と未来について考えるようになった」
2. 共生に関する新たな視点の獲得	「宗教のこと等偏見を超えて理解することができるようになった」 「訪問国との差異が存在することを認識した」 「訪問国との違いより、共通点が多いことを認識した」 「書物からでは学ぶことができない繋がりを構築できた」
3. 訪問地の人々との協働に関する新たな視点の獲得	「各々の立場を理解し、相手の視点で物事を見ることができるようになった」 「各々が抱える問題に対して互いに影響し合い、協働することができると感じた」 「訪問者ではなく、地元の人として訪問地への関心を持つことができた」 「学習したことを将来訪問地に何らかの形で還元したい」
4. 専門性に関する新たな視点の獲得	「専門が役立つかもしれないという実感を持つことができた」 「研究者は数値や文字としてのデータだけでなく、その背景にある人々の暮らしを考えることが大切だと実感した」 「学びを自分の専門分野に還元したいと考えるようになった」 「自分の専門から抜け出すことの難しさを認識した」
5. 自らを再検討する機会に関する新たな視点の獲得	「訪問地での経験が自分たちの視野を広げてくれ、感性や思考を磨いてくれた」 「異質な或いは馴染みの薄いものへの不安が消えた」 「専門の中で一般の人々に向き合っていないことに気が付いた」 「自分の立ち位置を客観的に捉えることができるようになった」 「多くの問題を身近に感じ、日本での自分の行動に立ち返って考えることができた」
6. 高い国際性の獲得	英語でのコミュニケーションに自信がついた 場数を踏むことで異文化環境へのハードルが下がった 常識や価値観を客観視出来るようになった
7. 専門以外の分野の幅広い知識の獲得	異文化との交流によって考え方の違いに気付き、知識や考え方を学ぶことができた 他分野に関心を持つことで結果的に自身の考えの幅が広がった
8. 他者と協働する力の強化	他分野の履修生と価値観をぶつけながら合意点を探るトレーニングを積めた チーム行動によってメンバーの価値観や立場を尊重する力がついた チームでの役割分担からメンバーの適正や立場としての振る舞い方を学んだ

こうした海外フィールドスタディの成果の一部は、超域プログラムの主な科目や内容[2)]と、高度汎用力の教育効果について三菱UFJリサーチ&コンサルティング（2017）が教職員及び履修生に対して実施した調査でも示された。この調査では、海外フィールドスタディを通じては、上記の履修生による総括とは別の表現ではあるが、海外フィールドスタディを通じては、「高い国際性」、「専門以外の分野の幅広い知識」、「他者と協働する力」の3つの能力が、他の能力と比較して向上していると評価された（表3）。なお、「高い国際性」に関しては、英語でのコミュニケーションに限らず、非英語圏での体験、特にホームステイなどを通じて、他者とのコミュニケーションに自信がついたという評価や、多様な視点を含むダイバーシティへの気付きと、それに伴う固定概念（価値基準）からの脱却が、海外フィールドスタディを通じてなされたという履修生からの評価もあった（奥野輔 2016）。また、「専門以外の分野の幅広い知識」に関しては、超域プログラムの履修生は多様な研究科に所属していること、また、GLOCOLが実施した海外フィールドスタディのように、設定されたテーマに興味・関心を持つ学生が応募・参加する形ではなく、必修科目として履修する形になっていたため、特に共通テーマに関しては、必ずしも全ての履修生の興味・関心がある内容になっているわけではない、というプログラム構成上の理由もあった。これは、と

もすれば一部の履修生にとってはモチベーションの低下にも繋がり兼ねないという側面はあるものの、一方で、想定していなかった気付きが得られるという利点もあるプログラム構成となっていた。

しかしながら、超域プログラム全般の教育効果として、「高い国際性」、「専門以外の分野の幅広い知識」、「他者と協働する力」は、上述の調査で用いられた9つの能力開発指標[3]のうち、何れも超域プログラムが強い影響を与える能力として分類されており、必ずしも海外フィールドスタディのみの教育効果とは言えない点に留意が必要である。これは、3.3で述べた通り、海外フィールドスタディは独立した授業科目ではあるものの、他の科目と相互に補完、連携する構成になっていることとも一致する。また、2017年度にマレーシアで実施した海外フィールドスタディの協力団体が、海外フィールドスタディの事前学習、海外実習、事後学習、全てのパートへの参画を通じた評価によると、「高い国際性」、「専門以外の分野の幅広い知識」、「他者と協働する力」以外にも、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」、「自ら課題を発見する力」、「高度な専門知識・研究能力」の3つの能力向上も見られたとの指摘があった。例えば、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」については、マレーシアにおける高齢者や精神疾患、歯科治療についての課題等、日本とマレーシアの比較から課題の本質と、それに必要な取組みについての理解を深めていた点、「自ら課題を発見する力」については、知らないことを知ろうとする傾聴の精神がみられたことや、マレーシア政府の政策の課題などを考察できるようになった点、「高度な専門知識・研究能力」については、マレーシア社会と日本社会の比較によって、自身の専門分野の理解を深めようとしている点、等がその理由として挙げられた。実際、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」、「自ら課題を発見する力」については、先の三菱UFJリサーチ&コンサルティング（2017）の調査においても、それぞれ22.9%、20.0%と、僅かながら能力向上のスコアの増加が見られている[4]。

一方で、9つの能力開発指標のうち、海外フィールドスタディを通じては、「課題の解決策を立案する力」、「課題解決の実現に挑む力」、「独創的な能力」、「高度な専門的知識・研究能力」の4つの能力の育成までは至っていないという評価がなされた。このうち、「課題の解決策を立案する力」、「課題解決の実現に挑む力」については、限られた海外フィールドスタディの実習期間での能力育成は困難かもしれないが、グローバルエクスプローラや超域イノベーション実践といった他科目と連動させた中・長期的活動を通じて、これらの能力が向上する可能性は高い。しかしながら、帰国後の履修生と現地社会との交流は自助努力によるところが大きく限定的であること、また、上述したような発展的活動のきっかけづくりとなり得る、現地社会との双方向の行き来を伴った交流がごく僅かの例を除いてできていないという超域プログラムの性質上の課題もある。このような課題に対して現状では、日本に対して関心のある学生や現地関係者に対しては、個別に留学プログラムや奨学金、その他必要な情報を提供する機会を設けるといった対応をしている。

4 結論

超域イノベーション博士課程プログラムの海外フィールドスタディを通じては、プログラムの定義する高度汎用力の中でも、特に「高い国際性」、「専門以外の分野の幅広い知識」、「他者と協働する力」の3つの能力が他の能力と比較して育成されること、また、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」、「自ら課題を発見する力」も一定程度能力の向上がみられることがわかった。一方で、「課題の解決策を立案する力」、「課題解決の実現に挑む力」、「独創的な能力」、「高度な専門的知識・研究能力」といった能力の育成までは至っていないこともわかった。

しかしながら、これには科目としての海外フィールドスタディの評価の困難さという課題とも関連する。現状では、履修生に対する成績評価は、事前学習への参加度・課題提出、実習への参加度、事後学習・報告会への参加度と報告書提出によってなされており、海外フィールドスタディの各コンポーネントと教育効果の関連性や、そこに発言するプロセスなどが明確になっているわけではない。この点に関しては、定期的なフォローアップ調査の実施や、大学教育における「海外体験学習」研究会や国際理解教育学会など、海外体験学習に関する研究が盛んな諸団体・諸研究者と連携していくといった対応策が考えられる。

超域イノベーション博士課程プログラムは、こういった中で、今後は、海外フィールドスタディの実践に当たっては、教育効果と、そこに発現するプロセスをより明確に認識し、質的な充実を目指していくフェーズに差し掛かっているといえる。

註

1) 超域コンパス：http://www.cbi.osaka-u.ac.jp/xcompass（Accessed 27th October 2018）
2) 指導教員以外の教員からの指導、プログラムの授業外での活動全般、企業・政府機関など学外者からの指導。
3) 高い国際性、専門以外の分野の幅広い知識、他者と協働する力、物事を俯瞰し本質を見抜く力、自ら課題を発見する力、課題の解決策を立案する力、課題解決の実現に挑む力、独創的な能力、高度な専門的知識・研究能力、の9つの能力開発指標は、超域プログラムのディプロマポリシーに設定されている高度汎用力と適合している。
4) スコアは能力開発状況を0～100の範囲で数値化し、変換なしを0、向上したを50、大いに向上したを100として算出。

参考文献

大阪大学未来戦略機構第一部門超域イノベーション博士課程プログラム2017年度海外フィールドスタディ・パラオチーム履修生（2017）『海外フィールドスタディ「パラオ」報告書』.

大阪大学未来戦略機構第一部門超域イノベーション博士課程プログラム2017年度海外フィールドスタディ・マレーシアチーム履修生（2017）『海外フィールドスタディ「マレーシア」報告書』.

大橋一友、敦賀和外、本庄かおり、安藤由香里、片山歩（2016）「海外体験型教育プログラムのつくり方－大阪大学グローバルコラボレーションセンターの経験から－」『大阪大学高等教育研究』4：73-86.

奥野輔（2016）「経済格差に囚われない心」思沁夫編『「共生」する瞬間　わたしたちの可能性から』大阪大学環境イノベーションデザインセンター:239-248.

子島進、岡島克樹（2015）「海外体験学習の多様性と可能性:これまでの10年・これからの10年」『国際地域学研究』18：65-76.

松田素二（2011）「4. 海外フィールドワーク」日本文化人類学会（監修）　鏡味治也、関根康正、橋本和也、森山工（編『フィールドワーカーズ・ハンドブック』）世界思想社：87-103.

三菱UFJリサーチ&コンサルティング（2017）『超域イノベーション博士課程プログラムの教育効果に関する調査　調査報告書』.

結城登美雄（2009）『地元学からの出発　この土地を生きた人々の声に耳を傾ける』農山漁村文化協会.

吉田文（2014）「「グローバル人材の育成」と日本の大学教育－議論のローカリズムをめぐって－」『教育学研究』81（2）：28-39.

吉本哲郎（2008）『地元学をはじめよう』岩波書店.

（投稿日：2018年10月31日）

（受理日：2019年2月4日）